

# 『時計じかけのオレンジ』によって引き起こされた 行動主義をめぐる「イメージ」への影響

——1960-70年代における行動主義心理学と行動療法への批判を中心に——

篠 木 涼

(立命館大学衣笠総合研究機構)

本論の目的は、1960年代から70年代にかけての行動主義心理学と行動療法をめぐる状況とイメージについて、1971年に公開されたスタンリー・キューブリック監督の映画『時計じかけのオレンジ』から起こった議論に焦点をあて明らかにすることである。同作には、作品内で暴力的な行動を行う登場人物を矯正するために行われる治療が、個人の人格を変えてしまう洗脳として、全体主義社会の恐怖として象徴的に描かれていた。ここで用いられた治療は、行動主義心理学の精神医学への応用である行動療法であると考えられた。この時期、行動療法を含む精神医学にはひろく社会的な批判が行われており、『時計じかけのオレンジ』のイメージは行動主義批判と結びつくことになった。本論では、まず、この時期行動主義心理学者の代表的研究者として批判の矢面にたったB.F. スキナーの議論を検討し、次いで行動療法家たちの反応とそこでのイメージの使われ方を検討した。検討の結果、スキナーの議論には彼に行われた批判を越える論点があり、それが『時計じかけのオレンジ』をモチーフに主張されてもいたこと、『時計じかけのオレンジ』によって行動療法家たちは、応答を余儀なくされたが、同作が描いたような、患者がスクリーンを観ながら苦痛を加えられる心理療法のイメージは、行動療法のイメージとして同作以前に流通していたことが明らかになった。

キーワード：行動主義心理学, 行動療法, 時計じかけのオレンジ, B・F・スキナー, ジョセフ・ウォルピ  
立命館人間科学研究, No.35, 49-65, 2017.

## はじめに

スタンリー・キューブリック監督の映画『時計じかけのオレンジ A Clockwork Orange』は、1971年の公開当時大きな反響を呼び論議を巻き起こした(新井 2004)。本作品の前半、享乐的に暴力と犯罪を犯してきた若者アレックスに対して、中盤、「ルドヴィコ療法」と呼ばれる心理療法が施され、後半はアレックスが前半とは正反対におとなしくされてしまった様子が描かれ

る。論議の主題となったのは、第一に、そこで描かれる暴力描写がきわめて鮮烈であったこと、第二に、そのような暴力を行う登場人物を矯正するために行われる心理療法が、個人の人格を変えてしまう洗脳と全体主義社会の恐怖として象徴的に描かれていたことである。そのため、『時計じかけのオレンジ』の見方は、第一に、極めて暴力的な有害な映画であるという非難と、第二に、むしろ全体主義の恐怖を批判的に描く作品としての評価という二つの相反する様相を呈することになった。

とりわけ、二つ目の主題である、暴力的であった主人公アレックスが受けさせられるルドヴィゴ療法は、薬物を射たれ、椅子に固定されたうえで、映像を見ることを強制されるというものであり、同時代の人々にだけでなくその後の映像表現にも影響を与えるものとなった。また、ルドヴィゴ療法は、当時行われていた行動療法をモデルとしたものと考えられるものであったため、行動療法家や、その背景にある行動主義心理学自体への批判を引き起こした。

先行研究として第一の主題に関しては、たとえば次のものがある。『時計じかけのオレンジ』に対する観客の感想は多様であったが、きわめて強いショックを受けた観客もいた。彼らにとって、作品自体が「ルドヴィゴ療法」のように働いた可能性があるという研究である (Krämer 2011)。だが、近年の研究の多くは、第二の主題を検討している。作品の後半が、秩序維持のため犯罪者に精神医学的手段さえ用いる政府に対する批判的な視線を示していることを評価し、そのような全体主義、コントロール社会、規律訓練への批判として本作を評価するのである (Gehrke 2001; Strange 2010; 塚田 2015)。これらの議論は、行動療法を、電気けいれん療法、精神外科などとともに科学的医学的な洗脳の手段として言及している。

しかしながら、第二の主題に関する先行研究は、作品の分析や理論的な検討に集中し、作品と同時代の行動主義心理学や行動療法との関係についての具体的な検討を行っていない。これは二つの点で問題である。第一のものは、作品分析という観点に関わる。物語の中心的な出来事となっているものが、同時代においていかなる意味合いをもっていたのか明らかになっていないという問題である。第二のものは、作品と社会との関係性を分析するという観点に関わる。作品が同時代の社会状況から影響を受け、また作品が同時代の社会から反響を引き起こしたと

いうことは、先行研究が指摘している。にもかかわらず、その反応について、作品の中心的な出来事に直接関わる集団の状況と反応について明らかになっていないという問題である。これらの問題の解決として、本論は、『時計じかけのオレンジ』によって引き起こされた批判に対する行動主義心理学者そして行動療法家の反応を、同時代の文献から明らかにする。まず、この時期行動主義心理学者の代表的研究者として批判の矢面にたった B.F. スキナーの議論を検討し、次いで行動療法家たちの反応と、そこでのイメージの使われ方を検討する。このような検討は、ポピュラー文化と心理学や精神医学との相互的な関係を明らかにするという課題について貢献することになると思われる。ポピュラー文化が科学から着想を得るという側面だけではなく、科学がポピュラー文化にどのように影響されるのかという課題である。

## I 1960年代における行動主義心理学

まず、『時計じかけのオレンジ』が公開される以前、1960年代までの行動主義心理学と行動療法の状況を簡単に整理しておく。行動主義心理学は、20世紀前半のアメリカ心理学の中心にあった。たとえば、次のように記述される。「1913年から1950年代前半までのおよそ40年間、行動主義的アプローチは、指摘されているように、決して均質な教説ではなく、競争相手がなかったわけではないにせよ、アメリカの実験心理学を先導していた。」(Richards 2010)

後に展開した認知心理学の理解のためにも、行動主義の理解は欠くことができない。Baars (1986) が、行動主義心理学を背景に認知心理学が登場する様子を描き出している。1950年代前半に、それまで中心的存在だった新行動主義のクラーク・ハルの影響力に陰りが見え始め、1950年代以降、徹底的行動主義として知られる

スキナーも実践的な行動変容の研究に打ち込むようになった。バースは、これと重なるおよそ1955年から1965年の間に、徐々に進展した科学的心理学における思想上の動きを「心理学の認知革命」と呼ぶ。「心理学の認知革命」として重要な出来事のひとつが、この時期の行動主義との対決だった。たとえば、Skinner (1957) に対する Chomsky (1959) の批判である。言語について後天的な学習に重きを置く行動主義心理学者スキナーに対し、生得説に立つ言語学者チョムスキーが批判を行ったというのである<sup>1)</sup>。だが、バースは、この時期にたんに行動主義心理学が認知心理学によって否定され乗り越えられたと解するべきではないと注意を促している。

実際、行動主義が哲学的立場として「物理主義的一元論」——心身問題において絶えず存在する立場の一つ——を意味しているかぎり、行動主義が誤りだと証明されることは決してありえない。行動主義が認知革命において「敗北」したというのは、ニュートン力学が今世紀初頭にアインシュタインの相対性理論に「敗北」したという以上に意味をなさない。アインシュタインの貢献はニュートン力学という背景なしにありえないし、認知的メタ理論は行動主義という背景に対してのみ理解できるものなのである。(Baars 1986: viii)

また、行動主義は、たんに心理学の学説としてだけでなく社会科学上の試みとして、20世紀半ばの社会学、政治学、経済学など社会科学の諸分野に大きな影響を与えていた (Rosenberg 2012)。すなわち、行動主義以前の心理学理論は、観察可能な人間の行動に観察不可能な心的状態が原因として影響をおよぼしているという二元論的な前提をもっていた。それに対して、行動

主義は、観察可能な対象に研究の対象を限定することで心身問題を回避する研究方針を提供したのである。

行動主義は、心理学の研究を導く「メタ理論」としては1950年代に影響力を失いつつあった。では、1960年代における状況はどのようなものであったのだろうか。1967年に刊行された一般向けの心理学誌『サイコロジー・トゥデイ』から見ていきたい。『サイコロジー・トゥデイ』は、1960年代以降における心理学の大衆化の中心であった雑誌である (Burnham 1987; Ward 2002)。刊行されたばかりの1967年、同誌は同時代の代表的な心理学者として三人の心理学者に対するインタビューを掲載している。この三人とは、「ミスター・心理学」としてエドウィン・G・ボーリング、「ミスター・ヒューマニスト」としてロロ・メイ、そして「ミスター行動主義」としてB・F・スキナーであった (Hall 1967)。ボーリングは、アメリカ心理学の歴史記述に大きな影響を与えた心理学者であり、メイは、実存主義心理学の創始者として知られている。スキナーは、行動主義心理学の創始者であるワトソン、新行動主義のハルヤトールマンに次ぐ、徹底的行動主義と呼ばれる立場の心理学者であった。心理学史上すでに認知心理学が登場し展開しつつあり行動主義は力を失いつつあったとされるにしても、『サイコロジー・トゥデイ』からは、行動主義、とりわけスキナーの存在は相変わらず大きかった様子が伺える。他にも、1969年の「人と機械」特集において、認知科学者のマーヴィン・ミンスキーやSF作家のアイザック・アシモフとともに、スキナーは、当時注目を集めつつあった人間と機械の関係性についてのエッセイを寄せている (Skinner 1969)。同時代の社会的なスキナーの存在感を示すものとして、1968年の『ニューヨークタイムズ』における「スキナー、自身が心理学でもっとも影響力のある人物だと認める」という広く彼の業績を紹介する記事が

1) チョムスキーによるスキナーへの批判とその受容のあり方については、佐藤 (2007) が批判を行っている。

ある (Rice 1968)。ここでは、彼の貢献として次のようなものが挙げられている。まず、動物をつかった実験室での研究で強化の原理を明らかにし、その行動の予測とコントロールを行ったこと、次に、実験装置としての「スキナー箱」や、学習装置としての「ティーチングマシン」の発明、さらに『ウォールデン・ツウ』(Skinner 1948)における行動主義的にコントロールされたユートピア社会の描写である。

## II スキナーと『時計じかけのオレンジ』

心理学の研究プログラムとしての行動主義が1950年代に退潮を迎えてからも、代表的心理学であったスキナーは社会的に著名な科学者として注目され続けていた。だが、1970年代に入るとすぐ、取り巻く状況は大きく変化した。

1971年、スキナーは、『自由と尊厳を超えて』(Skinner 1971)を刊行する。同書が、スキナー自身の行動主義的な社会思想をまとめたものとして大きな注目を受ける一方で、社会的な批判を巻き起こしたのである。注目の対象であったということでは、『サイコロジー・トゥデイ』は、同書の刊行に合わせて、一号をまるまるとつの特集を組んでいる (Harris 1971)。刊行から10年の間において、このような一冊の著作だけに特集を組んだのは同誌において一度だけである。なぜ、批判されたのか。『自由と尊厳を超えて』という題名の通り、自由や尊厳という伝統的に重要な価値を与えられてきた概念を否定し、それをコントロールにとって替えようとする思想、すなわち全体主義やコントロール社会を擁護する思想としてみなされたのである (Reinhold 1972)。このような批判が続いたため、スキナーは応答を行わざるをえなくなった。

1971年『時計じかけのオレンジ』の公開とは無関係に、『自由と尊厳を超えて』はスキナーの行動主義に対する批判を巻き起こしたのである。

1971年『時計じかけのオレンジ』と『自由と尊厳を超えて』という行動主義批判のきっかけとなる作品が、それぞれ行動主義心理学の外側と内側から出ていたということになる。このもともとは別個である出来事が、行動主義批判のなかで相互に参照されていった。以下では、この批判の中心となったコントロール概念を整理し検討していきたい。

スキナーにとって、行動主義心理学にとって、そもそも「コントロール」とはいかなる概念だったのか。コントロールという概念は、行動主義心理学の始まりに位置づけられるJ・B・ワトソンの宣言的論文「行動主義者のみた心理学」の冒頭にすでに現れている。

行動主義者が考える心理学とは、完全に客観的で実験に基づくような自然科学の一部門のことだ。その理論上の目的は、行動の予測とコントロールである。内観が、科学の方法にとって欠くことのできない部分となることはないし、データの科学的価値は、意識という言葉で解釈されている準備状態 readiness に左右されることはない。(Watson 1913: 158)

ここでワトソンは、19世紀後半以降の科学的心理学を批判し、より客観性を目指すものとして行動主義心理学を位置づけている。行動主義以前の科学的心理学は、意識を対象とし、そこからデータをとるための手段として内観という方法を採用してきた。行動主義とは、意識ではなくより客観的な観察可能な行動を対象とし実験を行うことで、行動を予測し、特定の行動を引き出すよう導くこと、すなわちコントロールを行うことを目的として始まったのである。スキナーもまた、ワトソンがこの論文で唱えた行動のコントロールという目的を共有している。行動主義の歴史家であるJ.A. ミルズは、20世紀前半の行動主義が実験から応用まで共有していた

信念をまとめ、次のように述べている。

心は可塑的で環境の影響に左右されるものであり、それ自体の運命もコントロールできるという確信は、次のような信念と整合的であった。社会的目標の本質とそれを達成するための手段を理解する人々によって、人間行動は社会的目標に適合するよう形成できるという信念である。この信念が、当時のアメリカの革新主義者と社会学者の思考の背景にある原動力となっていた。幾人かの行動主義者たち（スキナーはそのもっとも際立った事例である）がその先駆者たちと同じタイプであるのはきわめて明確である。動物は人間の代替物であり、実験室とその装置は社会的状況の類似物であり、実験者／理論家は社会のコントロール者であった。（Mills 1998: 8）

それでは、スキナーが考えたところのコントロールが社会に対するコントロールという視点をもつとして、それはすなわちコントロール社会や全体主義社会を促進するものと考えてよいだろうか。より具体的に、スキナーにとって行動のコントロールとは、どのようなものであったのだろうか。スキナーによる条件づけの理論をたどりながらみていきたい。行動のコントロールとは、条件づけの理論において役割をもつ概念なのである。

スキナーは、自身の条件づけの理論を、パブロフにより理論化され、ワトソンらそれまでの行動主義心理学の展開で行われてきたものとは異なるものとして区別する。スキナーは、パブロフやワトソンによる条件づけをレスポナント条件づけ（パブロフ的条件づけ、あるいは古典的条件づけ）と呼び、自分が議論する条件づけをオペラント条件づけ（道具的条件づけ）と呼ぶ。

レスポナント条件づけは、しばしば犬の事例で説明される。たとえば、実験室において決まっ

た時間に犬に食べ物を与えていると、犬は、次第に食べ物をもっていく実験者の足音を聞くだけで、唾液を出すようになっていたという事例である（O'Donohue & Ferguson 2001=2005）<sup>2)</sup>。スキナーの『科学と人間行動』によれば、「パブロフ自身は、行動を強めるすべての事象を“強化”と呼び、それによって生じた行動変化を“条件づけ”と呼んだ。しかしながら、パブロフの実験では強化子は刺激と対提示される」。「パブロフ型、あるいは“レスポナント”と呼ばれる条件づけでは、条件刺激が誘発する反応の大きさを増やすことや反応が誘発されるまでの時間を縮めることが、“強化”の内容である」（Skinner 1965=2003: 65=78）。犬と食べ物と足音の事例でいえば、食べ物という強化子が足音という刺激と対提示されることによって、犬の唾液を出すという反応の大きさが増大すること、反応が誘発されるまでの時間が短縮されることが、強化の内容となる。

スキナーのコントロール概念にとってより重要なのはオペラント条件づけの方である。オペラント条件づけは、強化 reinforcement と呼ばれる作用と罰 punishment と呼ばれる作用に分けられる。まず、強化は次のように説明される。

ちょっとした行動にある種の結果が続くとき、その行動は再び起こる可能性が高く、こういう効果をもたらす結果は強化子 reinforcer と呼ばれる。

2) O'Donohue & Ferguson (2001=2005: 38-39=40-4)によると、パブロフ的条件づけ、古典的条件づけ、レスポナント条件づけは次のように整理できる。刺激 s1 によって反応 r1 が引き出され、別の刺激 s2 からはその反応が引き出されることはない状況を想定する。このとき、刺激 s1 は無条件刺激、刺激 s2 は条件刺激、反応 r1 は無条件反応と呼ばれる。刺激 s1 の前に刺激 s2 を提示するのを繰り返すことで、刺激 s1 なしに刺激 s2 を与えただけでも、反応 r1 が引き出されるようになった場合、パブロフ的条件づけ、古典的条件づけ、あるいはレスポナント条件づけが成立しているという。刺激 s2 によって引き出された反応を条件反応と呼ぶ。この場合、無条件反応と条件反応は同一となっている。

たとえば、食べ物は、腹の減った生命体には強化子となる。その生命体が食べ物をもらえるような行動はすべて、その生命体が腹を減らしているときには繰り返される可能性が高い。一部の刺激は負の強化子と呼ばれる。そしてそうした刺激の強度を減らす——またはそれをなくす——反応はすべて、その刺激が再び起こったときには実行される可能性が高まる。つまり、覆いの下に入ることから暑い日差しから逃れたら、次にまた暑い日差しが起きたときには、再び覆いの下に入る可能性が高い。(Skinner 2002=2013: 27=40)<sup>3)</sup>

強化は、正の強化と負の強化に分けられる。正の強化とは、引用の前半のように、生命体が空腹状態にあり、何らかの行動をとったことによって、食べ物が得られて空腹が満たされて、後にその生命体が空腹状態にあるときその行動を繰り返す可能性が高くなるような場合である。なぜ「正」の強化なのかというと、その生命体に食べ物という刺激が加えられることによって当の行動の可能性が高まるからである。

これに対して、負の強化とは、引用の後半のように、生命体が暑い日差しのもとにあり、覆いの下に入った結果暑い日差しから逃れた後、次に暑い日差しが起きたとき再び覆いの下に入る可能性が高くなるような場合である。なぜ「負」の強化なのかといえば、暑い日差しという刺激が減ったことによって、覆いの下に入るという行動がとられる可能性が高くなるからである。スキナーは、この負の強化子のことを嫌悪的aversiveな強化子、ないし嫌悪刺激と呼んでいる。

罰とは、ある種の行動にある種の結果が続くときで、その行動が再び起こる可能性が低くなる場合と言い換えることもできる。従来負の強化が起きる場合の「負の強化子を提示すること」

と、正の強化が起こる場合の「正の強化子を除去すること」、たとえば暑い日差しの下に出されることや食べ物を奪われること、「この2つの可能性が罰を構成する」(Skinner 1965=2003: 185=220)。だが、社会のなかで意図的に行われるコントロールのなかで、スキナーは、治療であれその他の目的であれ、罰については批判的であり、1979年に「罰なき社会」と題した講演を日本の慶應大学で行っている(Skinner 1991)。

以上、長くなったがスキナーによる条件づけの理論をまとめてきた。スキナーは、ここでいう「強化の条件によって課される拘束 the restraint imposed by contingencies of reinforcement」のことを、「行動のコントロール」と呼ぶのである(Skinner 2002=2013: 60=85)<sup>4)</sup>。行動のコントロールは、レスポナント条件づけとオペラント条件づけ、いずれにおいてもなされる。いわば、行動のコントロールとは、強化によって行動が生起する可能性に影響を与えること一般である。それは、自然的社会的環境のなかで必ずしも人の意図とは関係なく常に生じている状況として考えることができる。したがって、スキナーの意味でのコントロールとは、1970年代に批判されたような全体主義的な社会によってなされるものも含みうるが、それ以上にはるかに一般的な事態のあり方を指しているのである。

『自由と尊厳を超えて』でスキナーは、このコントロール概念を用いて、伝統的と彼がみなすところの自由概念を批判していく。それでは、それは人間の自由を奪う全体主義的な社会を支持するものとなっているのだろうか。ここで、スキナーは、自由を論ずるそれまでの哲学が、自由をコントロールされていないことと想定しているという批判をおこなっている。スキナー

3) 以降、Skinner (1971) の引用は、翻訳が底本とした Skinner (2002) で記述する。

4) ここでいう「強化の条件」とは、「強化随伴」、あるいは「強化随伴性」と訳されることが多いものである。

によれば、哲学的な自由論が想定していたコントロール概念は、具体的には負の強化、嫌悪的な強化のみを想定している。それゆえにコントロールは、避け、逃れようとする感覚によって判断される事態として考えられている。しかし、上述の条件づけの観点からみると、そのような負の強化による嫌悪的なコントロールは、存在しうるコントロールの一部に過ぎないというのである。次のように述べている。

コントロールする者たちが非嫌悪的な手段に移行したとたん、自由の感覚は行動の指針として信用できなくなる。だがコントロールする者たちは、コントロールされる側が逃亡したり攻撃してきたりする問題を避けるために、そうした手に出でるだろう。(Skinner 2002=2013: 32=46)

ある条件が行動の可能性を高め、同時に感じられるような状態を作り出したのだ。自由とは強化条件の問題であり、そうした条件が作り出す気分の問題ではない。そうした条件が逃走や反撃を生み出さない場合には、この区別は特に重要となる。(Skinner 2002=2013: 37-38=52)

正の強化による、嫌悪的ではないコントロール、すなわち、個体が避けよう逃れようとしないうコントロールが存在する。そのような正の強化によるコントロールが問題になる場合には、従来の自由論は機能しない、むしろ自由を謳歌している感覚を伴うコントロールがあると批判するのである。ここで読み取れるように、『自由と尊厳を超えて』は従来の自由の概念を批判し、行動のコントロールに注目することを主張しているが、それはコントロール社会や全体主義社会を擁護しているというより、むしろ行動のコントロールを理解しないことによる危険性を指摘している。すなわち、実際にスキナーは自由に関して批判を展開していくのだが、それは自由

をめぐるそれまでの考え方を批判するのであり、その概念が主に意味していたことがらが重要ではないといっているのではない<sup>5)</sup>。

さらに興味深いことに、批判に応答する記事のなかで、スキナー自身が、同時代な現象として『時計じかけのオレンジ』に言及し自身の見解を説明している。『時計じかけのオレンジ』は、行動主義批判の手段として用いられただけでなく、スキナー自身によって行動主義の擁護の手段として用いられもしたのである。

刑罰の実践の際、ひとは自分たちの悪い行動を正当化しさえするというのをわたしは指摘してこなかった。幸運にも、今やこの指摘を、わたしの代わりに、映画『時計じかけのオレンジ』が行ってくれている。『ニューヨークレビュー』の記事において、クリストファー・リックスが主張するところでは、嫌悪療法によって主人公アレックスは「自由と尊厳を超え」させられてしまう。リックスは、映画の擁護にまわったアンソニー・バージェス（小説の作者）の言葉を引いている。「わたしとキューブリック（映画の監督）の寓話が言いたいのは、完全な自覚のもとで着手された暴力——意志的行為によって選択された暴力——の世界をもつことの方が、善くあるよう無害であるよう条件づけられた世界よりも好ましいということだ。」リックスがいうところでは、わたしはこのような意見に異議を唱える少数者のうちの一人なのだ。だが、わたしの期待では、そのような異議を唱える人々をはるかに多く存在している。あの映画は問題を間違っただけで描写しているのである。アレックスを善くしようとする「治療」が残酷なほど際立っているに対して、アレックスの「完全な自覚のもとで着手された意志的行為」の背後にある条件づ

5) この時期に行われたスキナーの議論への非難に対して、Skinner (1971=2013) の訳者の山形浩生が解説で批判を行っている。山形はまた、コントロールをめぐるこの論点を20世紀末以降の現代的な状況に展開している。

けの方はやすやすと見逃されてしまっているの  
ある。(Skinner 1972)

スキナーの観点ではコントロールとは人の行動を条件づけること一般であるから、コントロールがなくなることはありえない。それゆえ、「自由を求める闘争は、コントロールを減少させたり消去したりはしない。たんにそれを矯正するだけだ。しかし、善いコントロールとは何なのか。それを実行するのは誰なのか」、それが問題だというのである。問題なのは、コントロールのあり方を改めて正確に捉え直すことだということである。スキナーの観点からすると、『自由と尊厳を超えて』の主張そのものは、全体主義社会を支持するものではないにもかかわらず、それら支持していると不当にみなされているのであり、『時計かけのオレンジ』が描写し損なっているコントロールのあり方こそが問題だということである。

### Ⅲ 1960年代後半から1970年代の反精神医学、患者の権利運動と行動療法

それでは、スキナーの主張とは別に、『時計かけのオレンジ』が明示的にイメージとして参照した行動療法とは、どのようなものであったのか。先の引用においてスキナーが名を挙げた「嫌悪療法」は行動療法のひとつの技法である。ここからは、行動療法とはこの時期どのようなかたちで成立し、どのように社会に受け止められたのかを検討していく。心理学の研究プログラムとしての行動主義が退潮しつつあるとされる1950年代、むしろ行動療法は大きく展開した。

1950年代に始まる行動変容運動は、行動主義における全般的な信頼の低下に対する大きな例外として存在している。皮肉にも、この「応用」における成功物語が始まったのは、ちょうど、「純粹」

な実験心理学の絶頂期であるハルの行動理論についての幻滅感が広がり始めたときであった。  
(Baars 1986: 74)

ここで行動変容とは、行動療法と同義で使われている。バースは、この運動に影響のあった心理学者、精神科医としてスキナー、ジョセフ・ウォルピ、ハンス・アイゼンクを挙げる。ウォルピは、もともと精神分析家としてキャリアを始めた後、「パブロフかフロイトか」と問うなかで、パブロフと行動主義を選び、行動療法を始めた精神科医である(Wolpe 1961)。アイゼンクもまた、精神医学としての精神分析に対する批判者としても知られている(Eysenck 1985=1988)。山上(1988)によれば、1959年のアイゼンクによる論文「学習理論と行動療法」(Eysenck 1959)が「行動療法」という語の初出である。Mills (1998)が示すように、またそもそもワトソンが行動のコントロールを行動主義心理学の目的として主張してきたように、行動を変容させること、コントロールしようとすることは20世紀前半から試みられていた。それが、20世紀半ばからそれまでの行動主義の成果をふまえて、ほぼ同時にアメリカ、イギリス、南アフリカで、行動療法として明確なかたちをとって成立してきたのである(山上 1990)。ウォルピは、「行動療法の三十年」のなかで、行動療法とはいかなるものか次のように簡潔にまとめている。

行動療法とは、もともと1950年代前半に生じてきた、学習され持続している不適応的習慣を弱めたり消去したりするためにすぐれて用いられる、心理療法の一体系につけられた名称である。行動療法を他の治療アプローチと区別するのは、行動療法の方法が、学習についての確立された原理とパラダイムから構成されているというところである。オペラント条件づけの原理が、学級崩壊を引き起こす行動を減少させたり除去したり、望まし

くない性行動を制止したり消去したりするのに用いられてきた。(Wolpe 1997: 633)

ただし以下のことに注意が必要である。ここでウォルピは、行動療法の方法としてオペラント条件づけのみを挙げているのだが、実際には、行動療法においては、古典的条件づけ、レスポナント条件づけも多く用いられてきた。また、山上敏子によれば、行動療法は学習理論のみを基礎理論として採用しているわけではないし、単一の学習理論が存在していたわけでもなかった。「行動療法という名称は単一の考えかたや治療法にたいしてもちいられたものでなく、理論においても実践においても、複数のものがゆるやかに合わさって登場してきた研究動向であったということである（山上 1990: 13）。

1950年代以降展開していた行動療法をとりまく社会的状況はどのようなものであったのだろうか。電気けいれん療法の歴史を記述したニールランドとウォーレンによれば1960年代から1970年代は、患者の権利運動が高まり、広く精神医学を批判する様々な動きが生じていた時期であった。「1960年代後半から1970年代前半におけるアメリカの政治的社会的変動によって、患者たちの市民権の時代が起り、精神病院の「脱監禁化 decarceration」あるいは「脱施設化 deinstitutionalization」が推進され、狂気であるとはどういうことかという専門家の前提に異議申立てがなされた」のである（Kneeland & Warren 2008: 63）。たとえば、その具体的な展開として、1972年には、Wyatt v. Stickney 裁判における最高裁判決によって、インフォームドコンセントを受ける権利が認められている。本裁判は、病院における行動療法、具体的にはトークン・エコノミー法の使用における強制と患者の自発性をめぐって争われたものであった。トークン・エコノミー法とは、オペラント条件づけを用いた治療法で、強化子として擬似的な

貨幣を用いるというものである。「最終的に裁判所は、たとえ作業に治療的な効果があるとしても非自発的な作業は認められない。患者が連邦の最低賃金は得られる場合に自発的な作業は認められるとの判決を下した」。(Mills 1998: 175)

行動療法は、このような精神医学批判の高まりのひとつの中心であった。同時代の文献から検討すると、1974年には、行動変容、精神外科、化学療法が犯罪対策として使用される際、患者の権利を侵害するかたちで用いられたことに対する批判が高まり、具体的な政府の決定に至っている。

政府は、今日、連邦の犯罪対策予算をこれ以上一切行動変容の使用に用いることを禁止し、刑務所在監者、少年犯罪者、アルコール中毒者の行動の系統的操作のために予算が割り当てられたプログラムの停止を要求した。

また政府は、連邦の犯罪対策予算を、精神外科、医学研究、化学療法に使用することを禁止した。

『ニューヨークタイムズ』誌の調査によれば、行動療法は、近年法執行の手段としてますます重大に——そして問題含みに——なっている。(Oelsner 1974)

行動療法に対する非難の高まりのなか、1976年には、自身も行動療法を研究してきた心理学者クレズナーが、「行動変容の死について」というパロディ的なエッセイを心理学の専門誌に執筆している。

行動変容を喪失した悲しみは、連邦議会委員会、弁護士、囚人、医師、教育者、作家、心理学者、精神科医たちにも感じられるに違いない。囚人たちに、精神病患者たちに、パティ・ハーストに、われわれの社会の子どもたちに起こっていること

の出来合いの説明を、非難するための焦点を、彼らは失うのだから。しかし、これは他の用語が、改めて自由に、地位を認められるための絶好の機会なのだ。(Krasner 1976: 388)

クレズナーは、ストックホルム症候群で知られるパトリシア・ハーストを例にとりつつ、1970年代半ばに社会的な非難の的となっていた行動療法の状況を皮肉交じりに描き出すのである。次のように述べ、行動療法が洗脳と同じように理解されている状況を示唆している。「洗脳がすでに返り咲いており、行動変容の代わりに有力な候補になるだろう」(Krasner 1976: 388)。

このような行動療法に対する批判的な状況の形成にとって、『時計じかけのオレンジ』が重要な要素となっていた可能性がある。1970年代には、行動療法は、『時計じかけのオレンジ』、とりわけルドヴィゴ療法の描写と結びつけて考えられており、行動療法家たちは、そのイメージからの切り離しを行わざるを得なくなっていたのである。たとえば、次のようなものがある。

「行動変容」といえば、多くの人々は『時計じかけのオレンジ』を思い浮かべるだろう。マルコム・マクダウェルが椅子に縛り付けられ、目をテープで止められ、筆舌に尽くしがたい経験を強制されて、最終的には植物のようになってしまう。しかしますます増加しつつある行動療法家たちにとってみれば、このイメージは暴力的なまでに嫌悪的で、ひどく誤解を生むものだ。(Claiborne 1974)

ジョセフ・ウォルピもまた、『時計じかけのオレンジ』に言及しながら行動療法批判に対する応答をしている。

どのようにして行動分析によって行動療法の内容が決まるのかを説明するために、一種の非合法行動に関わる事例を取り上げよう。外部の多くの人々

は、とくにあの極めて誤解の多い映画『時計じかけのオレンジ』を見たことがある場合は、行動療法家たちが電気ショックを用いて治療を行うものだと考えがちである。ある裕福な商人の妻が、万引きが習慣になってしまったと私のもとにやってきた。彼女は数千もの万引きを犯していた。『時計じかけのオレンジ』から推測されるのとは対照的に、私はただちに嫌悪療法を行うためのショック器具に手を伸ばしたりはしなかった。私が実施したのは、慣例通りに決まりきった仕方での情報収集をする行動分析である。(Wolpe 1978: 61)

このウォルピの応答は、行動療法を取り囲む批判的な状況に直接答えるというよりも、自身の実践した嫌悪療法に至る慎重さを強調するもので、かつてスキナーが行ったのと同様、『時計じかけのオレンジ』の表現における暴力の過剰さを指摘するというかたちをとっている。

#### IV 行動療法におけるイメージ

1970年代の精神医学をめぐる動向において行動療法もまた批判にさらされ、その批判のなか『時計じかけのオレンジ』と結びついてきたことを検討してきた。逆に、行動療法家たちは、自らの実践が『時計じかけのオレンジ』と結びつけられることを批判してきた。それでは、具体的な実践とはどのようなものであったのだろうか、あるいは少なくともどのように描写されてきたのだろうか。ルドヴィゴ療法の特徴であるイメージを見せることと治療自体による患者への苦痛といった要素はどのようなものであったのか。行動主義心理学は、最初期のワトソン自身、有名な「アルバート坊や」の実験を撮影するなど、実験記録などのかたちで写真や映画などのイメージと関わりをもってきた(Watson & Rayner 1920; Lashley & Watson 1922)。

先に引用した論文「行動療法の三十年」にお

いて、行動療法の治療対象の例として「望ましくない性行動」を挙げていた（Wolpe 1997: 633）。ここでウォルピが「望ましくない性行動」についての研究として挙げているのが、Feldman & MacCullough（1971）である。本書では、『時計じかけのオレンジ』がモデルとしたような、行動療法におけるイメージの使用が図入りで詳細に記述されている。それによれば、行動療法におけるイメージは、もともとは静止画が用いられていたものが、「迫真性」を求めて静止画から動画が用いられるようになり、次第に映写機の台数も増加していったようである。また治療の実施の当初、患者は、椅子に座った状態であったのが、後にベッドに寝た状態で天井にはられたスクリーンに映写されるイメージを見るときかたちに変化していった。

もともとのシステムで用いられたのは静止画の映写機一台だけだった。今回は、このような映写機が二台、療法家の機械に関する負担を減らし、以下に描写される仕方では患者のオペラント・コントロールが増大するのを可能にするために用いられた。さらに、動画刺激を組み込むために、二台の映画映写機が用いられ、全部で四台の映写機が用意された。

かつてのシステムでは、患者は椅子に座り、後ろの映写機から鑑賞箱に映写されるスライドを見る。しかしながら、患者が不快感を訴えることがあったため、より快適な位置を考えることが必要になった。そのため、これから記述するトライアルでは、患者は、スライドを見るためにベッドに横たわり、スライドは角度をつけられた鏡によって天井のスクリーンに映写されるようにした。（Feldman & MacCullough 1971: 65-66）

ルドヴィゴ療法の描写が大きなインパクトを持ったのは、それが映像を見せるということ

手段としている点にあると思われるが、実際フェルドマンとマカロックが行った治療においては、複数の映写機を用いたより複雑な操作が行われていたこと、そして患者の不快感に対して配慮がなされてもいたことが述べられている。

さて、ウォルピが先の引用において例に挙げた、Feldman & MacCullough（1971）が『同性愛行動』と題されたものであったのは偶然ではない。行動療法にとって、同性愛は、たんに「望ましくない性行動」の一例として治療の対象であったのではなく、その中心的な対象のひとつであったのである。実際、嫌悪療法が試みられた最初期の対象は、同性愛であったようである。たとえば、次のように述べる文献も存在する。

嫌悪療法についての西欧でのもっとも初期の説明の一つは、1935年にマックスによって与えられた。この簡潔な報告書は、電気ショックの実施によって患者の同性愛への強い関心が減少したと記述している。フェティシズム的刺激（おそらくは想像によるもの）が電気ショックと「連結」したかたちで提示された。（Rachman & Teasdale 1969: 2）<sup>6)</sup>

1960年代後半から1970年代、犯罪者の矯正として行動療法を行うことの是非が問題となっていたが、同時期、行動療法が同性愛を治療すべき「望ましくない性行動」として扱ってきたことへの批判もまた行われていた。そのため、フェルドマンとマカロックは、Feldman & MacCullough（1971）の冒頭、次のようにして批判に答えている。

多くの同性愛の人々が自身の生き方に満足し治療を望んでいないというのは真実である。同じように、多くの同性愛の人々が自身の生き方に満足し

6) このような嫌悪療法の最初期についての記述からすれば、当初、想像によって自ら与えるものであった刺激が、写真や映画といった具体的なイメージを用いて与えられるようになったと考えられる。

ておらず治療を求めているというのも真実である。市民として、われわれは、前者の人々が社会の異性愛の成員と平等の条件で生きる権利を尊重している。療法家として、われわれは、同じように、後者の人々が自身の性的な方向を変化させる助けを求める権利を尊重している。彼らの選択する生き方についていずれかを否定することは、きわめて重要な人間的自由の否定である。(Rachman & Teasdale 1969: vii)

つまり、行動療法家たちは、治療を求めない人々に無理に治療を行おうとはしてない、治療を求める人々の権利の主張に答えているのだというのである。このような行動療法家からの応答に対し、同時代の政治学者のデニス・アルトマンは、行動療法家たちが、同性愛を「望ましくない性行動」という治療対象のカテゴリーに割り振り、治療すべき病気だと考えさせる環境を形成していること自体が問題であると指摘していた。

幸運なことに近年、一部に、映画『時計じかけのオレンジ』の影響から、嫌悪療法の倫理と技術両方を疑問視する傾向が増大しつつある。「治療」のために苦痛を与えることは多くの人から見ても受け入れられないばかりか、より重要なことに、同性愛を「治療」することがまさに適応の強制としてみなされるようになってきているのである。嫌悪療法家は、「患者たち」が自発的に訪れるのだと主張するが、彼らが理解していないのは、同性愛者に自身を病気だと考えさせている自分たちの行為の帰結であるということだ。(Altman 1973=2010: 58=65)

行動療法家の受け取り方とは逆に嫌悪療法の問題を指摘するものとして、『時計じかけのオレンジ』はむしろ好意的に参照されている。ここで興味深いのは、行動療法家たちが、治療は、患者による自発的な意思決定の結果であると主張

するのに対して、行動療法を批判する側は、行動療法が、同性愛を治療の対象とすることで、つまりは「望ましくない性行動」の一つとすることで、治療に向かうというような行動を引き起こす社会環境を形成していると批判していることである。治療に向かう行動を引き起こすということに関してみると、批判者たちの方が、先にみたスキナーの指摘のような社会的な環境のコントロールの問題に意識的であったことが伺えるのである。

このようにセクシュアリティ、とりわけ同性愛にかかわる行動の変容が行われてきたなかで、写真や映画のイメージが重要な役割を果たしていたことを、1967年の『ニューヨークタイムズ』に掲載された記事に見て取ることができる。「フロイトは間違っている、と行動主義者はいく——神経症は習慣にすぎない」と題された記事である。ここでは、ウォルピのイメージを使った同性愛者に対する嫌悪療法の様子が写真付きで描かれている。「罰と報酬」という題がつけられたこの写真が映し出している内容は、以下のキャプションの通りである。

右の側にいる行動療法の主導的な提唱者ジョセフ・ウォルピ博士と助手は、ふくらはぎに括りつけた電極を通じて電気ショックを同性愛男性に行っている。ヌードの男性の像がスクリーンに現れると、ショックが始まる。女性の像が投影されると、ショックは止む。同性愛の刺激が、苦痛と結びつき、やがて制止されるだろうという考えである。(Hunt 1967)

すなわち、行動療法の代表者であるウォルピが、「スクリーン」を観る「同性愛男性」に対して「電気ショック」によって「苦痛」を与える様子が映し出されているのである。後にウォルピ自身が、『時計じかけのオレンジ』以後、電気ショックの使用は通常は慎重に行われるものであると

反論することになったのはすでにみたとおりである。しかし、当のウォルピが対象となって行動療法を紹介するメディアの記事において、電気ショックを行う様子が写真つきで伝えられていたのである。

さらに、このキャプション付きの写真は、専門家と学生に広く読まれたとされる精神病理学の教科書である Millon (1969) に嫌悪療法の事例として掲載された (Millon 1969: 591)。1974 年に出された同書の増補改訂版である Millon & Millon (1974) は次のように書いている。

この本は、実質的には、ファーストオーサーが 1960 年代後半に執筆した『現代精神病理学』という先行する仕事の増補改訂版である。先の本は、同業の専門家たちに高く評価され、刊行初年に 200 以上の大学で採用された。(Millon & Millon 1974: vii)

Millon (1969) は、刊行初年、すなわちおそらくは 1969 年から 1970 年にかけて 200 以上の大学で教科書として採用されていたというのである。そしてこの写真は、Millon & Millon (1974: 43) においても変わらず掲載されている。『時計じかけのオレンジ』以前に、すでに『ニューヨークタイムズ』のようなメディアにおいて、そして精神病理学の教科書において、「スクリーン」を覗く人間が「苦痛」を受けるかたちをとる「療法」のイメージが流通していたのである。

最後に、『時計じかけのオレンジ』と行動療法に見られた映像や写真というイメージの使用が洗脳あるいはマインドコントロールのイメージに与えた影響について一例を挙げておきたい。『時計じかけのオレンジ』以前と以後の具体的な映画作品にみてとることができる。まず、『時計じかけのオレンジ』以前、1959 年のリチャード・コンドンの同名の小説を映画化したジョン・フランケンハイマー監督による 1962 年の作品『影

なき狙撃者 The Manchurian Candidate』がある。原作と本作を通じて、「The Manchurian Candidate」という言葉が、その後マインドコントロールにかけられた者を示すものとして広く用いられるようになった (Marks 1991)。そのような作品である。朝鮮戦争時に洗脳され暗殺者となった元軍人を描いたこの作品には、兵士を洗脳する「パブロフ・インスティテュート」という、イワン・パブロフの名が付けられたソヴィエト連邦の機関が登場するのである。しかしながら、本作では、イメージを用いた行動療法的な描写は描かれていない。ここではむしろ洗脳の過程は催眠術のようなものとして描写されるのである。それが、2004 年にジョナサン・デミ監督が同原作をもとに行った映画化『クライシス・オブ・アメリカ The Manchurian Candidate』における洗脳の描写では、異なってくる。本作では、マイクロチップの埋め込みなど新たな技術が用いられるなかで、1970 年代に批判された様々な医療的技術が用いられており、そこに椅子に座りイメージを見続けさせられている人の姿が描かれているのである。

## V おわりに

ここまでの検討を整理すると、大きく『時計じかけのオレンジ』の引き起こした反響によって、行動主義と行動療法は、少なくとも 1970 年代のあいだそれに対する対応を行わざるをえないような状況に置かれたということが言える。スキナーの『自由と尊厳を超えて』は、それ自体の議論のもつ印象から、『時計じかけのオレンジ』で描かれた全体主義やコントロール社会を擁護する思想として批判された。『時計じかけのオレンジ』での洗脳表現は、同時代の行動療法を含む精神医学に対する批判と結びついていったのである。

『時計じかけのオレンジ』を軸に管理社会や全

体主義社会ということで行動主義に行われてきた批判をめぐっては次のことに注意すべきである。一口に行動主義といっても、心理学理論あるいはその方法論としての行動主義心理学の主張、とりわけスキナーの思想、その応用として形成された行動療法、さらにその刑務所などにおける具体的な実践とは区別して考えられるべきである。行動主義は管理社会や全体主義社会を支持する科学としてもっぱら言及され、スキナーもまた批判された。しかし、彼のコントロール概念は、管理社会や全体主義社会に関して『時計じかけのオレンジ』が見逃した問題を批判的に捉えるのにも用いられるものである。

行動療法そのものは、新行動S-R仲介理論、応用行動分析、社会学習理論といった展開があり、さらに認知療法と結びついた認知行動療法として、現代まで広く用いられるものになっている(山上1990)。『時計じかけのオレンジ』がルドヴィゴ療法のモデルとしたようなイメージの使用は重要な役割を果たしてきたが、治療の際には、患者の不快感を取り除くよう、装置の改良がなされるなどしてきた(Feldman & MacCullough 1971)。しかし、たとえば同性愛を「望ましくない性行動」として分類することによって、それに対する同時代的な社会的差別と結びついてもきた。『時計じかけのオレンジ』以後、行動療法の暴力性のイメージを否定するために、ウォルピは、行動療法と電気ショックを結びつけること批判した。しかしながら、同性愛者の患者に嫌悪療法を施す様子を写した『ニューヨークタイムズ』の写真記事によって、ウォルピの意図とは別にして、自らが行動療法と電気ショックと患者の苦痛を結びつけるイメージの流通に役割を果たしていたのである。「スクリーン」を観る人間が「苦痛」を受ける「療法」のイメージ自体は、1960年代後半には流通していたが、それが1970年代以降行動療法批判と『時計じかけのオレンジ』をきっかけとして「洗

脳」のイメージとして結びついていった、そのように思われる。

## 引用文献

- Altman, D. (1973) *Homosexual: Oppression and Liberation, revised edition*. Ringwood: Penguin Books. 岡島克樹・河口哲也・風間孝(訳)(2010) *ゲイ・アイデンティティー抑圧と解放*. 岩波書店.
- Baars, B. J. (1986) *The Cognitive Revolution in Psychology*. New York: The Guilford Press.
- Burnham, J. C. (1987) *How Superstition Won and Science Lost: Popularizing Science and Health in the United States*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- Chomsky, N. (1959) A review of B. F. Skinner's verbal behavior. *Language*, 35 (1), 26-58.
- Claiborne, R. (1974) Behavior modification and its positive aspects. *New York Times*, April 28.
- Eysenck, H. J. (1959) Learning theory and behaviour therapy. *The British Journal of Psychiatry*, 105 (438), 61-75.
- Eysenck, H. J. (1985) *Decline and Fall of the Freudian Empire*. London: Penguin Books. 宮内勝・中野明德・藤山直樹・小澤道雄・中込和幸・金生由紀子・海老沢尚・岩波明(訳)(1988) *精神分析に別れを告げよう—フロイト帝国の衰退と没落*. 批評社.
- Feldman, M. P., and MacCullough, M. J. (1971) *Homosexual Behavior*. Oxford: Pergamon.
- Gehrke, P. J. (2001) Deviant subjects in Foucault and *A Clockwork Orange*: Congruent critiques of criminological constructions of subjectivity. *Critical Studies in Media Communication*, 18 (3), 270-284.
- Hall, M. H. (1967) Mary Harrington Hall interviews. *Psychology Today*, 1 (5), 16-29.
- Harris, T. G. (1971) The B. F. Skinner's manifesto: an introduction. *Psychology Today*, 5 (3), 33-36.
- Hunt, N. N. (1967) Freudians are wrong, the behaviorists say: a neurosis is 'just' a bad habit. *New York Times*, June 4.
- Kneeland, T. W. and Warren, C. A. B. (2008) *Push-button Psychiatry: A Cultural History of Electroshock in America, updated edition*. Walnut Creek: Left Coast Press, Inc.

- Krämer, P. (2011) 'Movies that make people sick': Audience Responses to Stanley Kubrick's A Clockwork Orange in 1971/1972. *Participations: Journal of Audience & Reception Studies*, 8 (2), 416-430.
- Krasner, L. (1976). On the death of behavior modification: Some comments from a mourner. *American Psychologist*, 31 (5), 387-388.
- Lashley, K. S. and Watson, J. B. (1922) *A Psychological Study of Motion Pictures in Relation to Venereal Disease Campaigns*. Washington: United States Interdepartmental Social Hygiene Board.
- Marks, J. (1991) *The Search for the "Manchurian Candidate."* New York: W. W. Norton.
- Millon, T. (1969) *Modern Psychopathology: A Biosocial Approach to Maladaptive Learning and Functioning*. Philadelphia: W.B. Saunders.
- Millon, T. and Millon, R. (1974) *Abnormal Behavior and Personality: A Biosocial Learning Approach*. Philadelphia: W. B. Sanders.
- Mills, J. A. (1998). *Control: A History of Behavioral Psychology*. New York: New York University Press.
- O'Donohue, W. and Ferguson, K. E. (2001) *The Psychology of B F Skinner*. SAGE Publications, Inc. 佐久間徹（監訳）（2005）スキナーの心理学—応用行動分析学（ABA）の誕生。二瓶社。
- Oelsner, L. (1974) U.S. bars crime fund use on behavior modification. *New York Times*, February 15.
- Rachman, S. & J. Teasdale. (1969) *Aversion Therapy and Behavior Disorders: An Analysis*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Reinhold, R. (1972) B. F. Skinner's philosophy fascist? depends on how it's used, he says. *New York Times*, April 21.
- Rice, B. (1968) Skinner agrees he is the most important influence in psychology. *New York Times*, March 17.
- Richards, G. (2010) *Putting Psychology in its Place: Critical Historical Perspective, third edition*. London: Routledge.
- Rosenberg, A. (2012) *Philosophy of Social Science 4th edition*. Boulder: Westview Press.
- Skinner, B. F. (1948=2005) *Walden Two*. Indianapolis: Hackett Publishing.
- Skinner, B. F. (1957) *Verbal behavior*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Skinner, B.F. (1965) *Science and Human Behavior*. New York: Free Press. 河合伊六・長谷川芳典・高山巖・藤田継道・園田順一・平川忠敏・杉若弘子・藤本光孝・望月昭・大河内浩人・関口由香（訳）（2003）科学と人間行動。二瓶社。
- Skinner, B. F. (1969) The machine that is man. *Psychology Today*, 2 (11), 20-25.
- Skinner, B. F. (1971) *Beyond Freedom and Dignity*. New York: Knopf.
- Skinner, B. F. (1972) Freedom and dignity revisited. *New York Times*, August 11.
- Skinner, B. F. (1991) The non-punitive society. 行動分析学研究, 5 (2), 98-106. 佐藤方哉（訳）（1991）罰なき社会。行動分析学研究, 5 (2), 87-97.
- Skinner, B. F. (2002) *Beyond Freedom and Dignity*. Indianapolis: Hackett. 山形浩生（訳）（2013）自由と尊厳を超えて。春風社。
- Strange, C. (2010) Stanley Kubrick's A Clockwork Orange as art against torture. *Crime Media Culture*, 6 (3). 267-284.
- Ward, S. C. (2002) *Modernizing the Mind: Psychological Knowledge and the Remaking of Society*. Westport: Praeger.
- Watson, J. B. (1913) Psychology as the Behaviorist Views it. *Psychological Review*, 20, 158-177.
- Watson, J. B. and Rayner, R. (1920) Conditioned emotional reactions. *Journal of Experimental Psychology*, 3 (1), 1-14.
- Wolpe, J. (1961) Pavlov or Freud. *The Lancet*, 277 (7181), 824-825.
- Wolpe, J. (1978) The human value of behavior therapy. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 29, 58-64.
- Wolpe, J. (1997) Thirty years of behavior therapy. *Behavior Therapy*, 28 (4), 633-635.
- 新井潤美(2004) 文学, 映画, そして階級 11 アントニー・バージェスの『時計じかけのオレンジ』(上). 月刊百科, 499, 44-47.
- 佐藤方哉(2007) 言語学 名著再読 13 スキナー『言語行動』. 月刊言語, 36 (1), 98-103.
- 塚田幸光(2015) シネマティック・ロボットミー——テクノロジー, 暴力, 『時計じかけのオレンジ』——. 塚田幸光(編) 映画とテクノロジー. ミネルヴァ

書房. 123-147.

(受稿日：2016. 6. 1)

山上敏子 (1988) Eysenck と神経症理論. 行動療法研究 (特集), 37-42.

(受理日 [査読実施後]：2016. 10. 14)

山上敏子 (1990) 行動療法. 岩崎学術出版社.

Original Article

*A Clockwork Orange* and the Influence of It on the Images  
of Behaviorism: The Criticisms against Behavioristic  
Psychology and Behavior Therapy in 1960–70s

SHINOGI Ryo

(Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

---

The purpose of this paper is examining the situation and image about behaviorist psychology and behavior therapy from 1960s to 1970s, focusing on the arguments around the film *A Clockwork Orange*, a motion picture which was made by Stanley Kubrick in 1971. The movie impressively described a fearful situation that the totalitarian and control society used psychotherapy as a method of mind-control or brain-wash. The psychotherapy which this work described is behavior therapy, an application of behaviorist psychology to psychotherapy. During this period, psychotherapy including behavior therapy was criticised by anti-psychotherapy movements. The image of *A Clockwork Orange* was connected to the criticism against the behaviorism. This paper analyzed the argument made by B. F. Skinner who was the psychologist criticized as supporting totalitarian regimes, on the one hand, and examined how behavior therapists responded to the criticisms inspired by *A Clockwork Orange* and how the image was used by behavior therapists, on the other hand. The conclusion is that Skinner argued the point which could go beyond the criticism against him, using *A Clockwork Orange* as an example, and the image that a patient watched a screen and had electrically shocked by a doctor was circulated by behavior therapists themselves before *A Clockwork Orange*, although they denied using the electric shock easily.

**Key Words** : behaviorism, behavior therapy, B. F. Skinner, Joseph Wolpe, Clockwork Orange  
*RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES*, No.35, 49–65, 2017.

---